

# 第8回風景デザインサロン●開催レポート

## 第8回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年8月22日(金)に、福岡市薬院にて、第8回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：福島綾子氏(九州大学大学院芸術工学研究院助教)
- テーマ：文化的景観と九州の風景
- 開催時間・場所：18:30~21:00 / I CONE (福岡市薬院)
- 参加人数：24名

本年度第2回目のサロンでは、福島先生がご自分で撮影された五島の風景写真や海外の事例をもとに、文化的景観とはどういうことか、また、世界遺産に登録した地域の海外の事例と登録を目指した取組を行っている五島の教会群の現状と課題について、世界遺産に登録するためには、その地区の住民に対しての配慮と世界遺産登録後の戦略を考えることが重要ということをお話して頂きました。



第8回風景デザインサロンの様子

## 講演内容の骨子

### 1. 文化財の概念と価値評価

文化財保存は海外において専門分野は確立されているが、日本においてはまだ確立されていない。それは日本において文化財保存の理念が欠落していることと無関係ではない。よって日本において文化財の理念を考えることが重要である。現在、日本で使われている「文化遺産」という言葉は化石的な印象を感じてしまうので、私は文化財という言葉を使っている。文化財は元来年月が経った物でピラミッドや法隆寺などの記念物を指していたが、近年では「place」と呼ばれ、どんな場所でも意味があるものとされている。そして、かつて文化財は有形だけであったが最近では思想・信仰・生業などの無形のものまで含まれており、文化財にならないものはない。しかし、文化財の価値は可能な限り客観的に評価しなければならず、その内容は審美的価値や歴史的価値、社会的価値などのさまざまで、それらを総合して価値を評価する。しかし日本ではこのような海外の評価手法ではなく、大学の先生が一人で文化財の価値を偏った観点で評価してしまうことが多い。また、景観はデザインされた景観や文化的景観、自然景観に分類され、これは人為的介入の大きさで区別される。

### 2. 文化的景観

文化的景観の概念は1920年にアメリカで「文化的景観は自然景観という媒体に対して、文化的な民族の集団が介入したことによって形成された景観」と定義されている。日本では2005年の文化財保護法改正で追加された新しい価値観であり、従来の名勝、史跡、伝統的建造物群保存地区、無形文化財などの枠組みで捉えきれないもので、人々の生業の結果として作られた景観である。また、景観は常に変化していくものであって、現在も変化を続けているものを指す。京都大学の神吉先生は文化的景観のことを「ただならぬ普通」と呼んでいた。普通に見えるが、普通ではない感性を満たしてくれる景観といった考えに私も共感する。

文化的景観の世界的な例として、オーストラリアの「エアーズロック」が挙げられる。世界的に見ても大きい一枚岩の自然景観であり、アボリジニーにとっては聖地でもある。彼らは自分たちが土地を所揺するという概念はなく自分たちが土地に所有されるという考えをもっており、岩に対してアボリジニーが営んできた歴史が文化的景観として評価される。

### 3. 世界遺産と文化的景観

世界遺産における文化的景観導入(1992)の背景としては、文化多様性や持続可能性、世界における遺産の均衡化が挙げられる。その登録基準としては「顕著な普遍的価値」が非常に重要でその内容は国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性をもつような、傑出した文化的な意義と解釈される。しかし、現状として世界遺産の問題となっていることは、「持続可能性」である。世界遺産における有効なマニュアルは確立されておらず、遺産管理の責任は加盟国にある。世界遺産に登録されることによって、その土地の産業構造が変化する場合が多く、フィリピンのコルディレラの棚田もその例である。それによって世界遺産の崩壊だけでなく、コミュニティの崩壊にも繋がる危険性がある。これを避けるためには、国際機関や政府などの権力・お墨付きに依らない、住民自身による資源・財産の価値評価が必要となる。私が考える文化的景観とは、地域において過去に起きたあらゆる人間活動を、地域住民が再評価・再定義するというものである。



コルディレラの棚田、フィリピン



エアーズロック、オーストラリア

## 質疑応答

福島氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。残念ながら時間が足りず学生からの質問は受けられませんでした。風景デザイン研究会の会員メンバーから多くの質問や感想をいただきました。

主な質疑応答は以下のとおりです。

1) (質問) 良い風景を見て良いと感じる心を養うにはどうすればいいのか？

(回答) 日本には、文化財の価値に関する教育がなされていない。その理由として、教育者の不在が挙げられる。教育者の人材育成が日本には必要である。欧米では文化財に関する教育が義務づけられており、オーストラリア等の歴史が浅い国でも文化財教育に力を入れている。

2) (質問) 景観を考える時、地域が観光化した時の住民生活をどう考えるのか？先ほど話された五島の漁村風景の中で、漁港に網が置かれている風景は文化的景観と呼べるのか？

(回答) 網がいない物でも、そこにあることを否定できない。住民の話では、昔は生ゴミも海に捨てていた。それが昔の生活スタイルであって、その行為を否定できない。否定できないということは、景観を構成する要素であると言わざるを得ない。生業の活動は審美によって評価される物ではなく、歴史的価値で評価すべきだと考える。

3) (質問) 元々景観は美しいのかという疑問をもっていたが、文化的景観のような概念があることを知りほっとした。現在は色々な文化が融合しているが、近年作られた六本木ヒルズのような新しい物の評価はどうすればいいのか？

(回答) 答えづらい。今の質問は農村景観ではなく都市景観に関するものだと思う。本来民主主義は、ルールがありその中で住民自らが考えるものである。しかし日本人は戦後にアメリカから教わった民主主義をルールがないものと勘違いをしたのがそもそもの間違いで、それが現在の日本の都市景観の醜さを作り出した。六本木ヒルズなども評価できるかもしれない。しかし本来、文化的景観とは「時間によるテストを経たもの」を評価する。

4) (質問) 私自身、現在の都市再開発には文化がないと感じている。福岡について考えてみて、現在までの福岡の変遷、特に都心部には文化的価値があると思うか？

(回答) 大きく言えば無いと思う。しかし、博多など地区レベルの取組には文化はあると言える。しかし、総合的に考えると文化的価値を考えたい。これから是非取組んでほしいと思う。

5) (質問) 文化財に興味をもったきっかけは？

(回答) 元々は考古学専門だった。海外の遺跡を巡っている内に、過去ではなく未来に興味を持った。亡くなった人々だけでなく、今生きている人に対して、自分には何が出来るのかと考えるようになった。

6) (質問) 経過の過程を管理するガイドラインの中で具体的な手法を用いている先進事例はあるのか？現状として、行政は制度論を用いてマニュアル化している場合が多い。理想的に、発展的に変化していくものを担保する手法はあるのか？

(回答) 日本ではまだ見られない。アメリカの保存地区では、地区レベルにおいて改修箇所のデザインレビューを行い、改修するデザインがその地区に調和するか議論する。あらかじめ設定されたデザインガイドを使用してマニュアル化するのではなく、その都度議論を行う。そして次の改修の際に、前回の記録から、なぜ当時のデザインを採用したかを確認し、発展的なガイドラインを作成している。

3) (質問) 現在福島さんが関わっている五島の教会群において、長崎市内でも閉鎖されている教会はたくさんあるが、観光の面から考えると、どんなに文化的価値がある教会でも過疎地域が多い。教会を守っている限界集落の保全はどうすればいいのか？

(回答) 世界遺産に登録することは、地区を維持することであるべきだ。五島の教会について考えると、教会は文化財ではなく信仰の場であるので、人がいない教会は教会の意味をなさない。世界遺産が博物館であればこのままでもいいかもしれない。しかし、人が住む地域を指定するなど、人間のコントロールが出来ない地区は世界遺産に登録すべきではない。世界遺産登録に関して、そもそも論の見直しが必要である。五島は今のままでは世界遺産に登録すべきではない。



富士山



堂崎教会(五島市)

## 次回の予定

次回サロンの予定は、次のとおりです。皆さん奮ってご参加下さい。

- 講師：遠藤敏行氏(いであ株式会社九州支店)
- テーマ：デザイン・コラボレーションー松江・岸公園を題材として
- 開催日時：平成20年9月24日(水)18:30から2時間程度
- 開催場所：I CONE(福岡市薬院一丁目)予定